人文会ニュース

jinbunkai news
April 2025

NO. 149

1 15分で読む
C・G・ユングの思想を振り返る　猪股　剛

16 図書館レポート
知の創造的遺産
——上智大学中世思想研究所の挑戦　胡婧・佐藤直子

26 編集者が語るこの叢書・このシリーズ㉛
ロシア語文学のミノタウロスたち　栗本麻央

www.jinbunkai.com

慶應義塾大学出版会
https://www.keio-up.co.jp/

大学生のためのウェブ調査入門
社会科学からみた設計と実装

吉村治正・増田真也・正司哲朗著　近年普及が進むウェブ調査についての入門書。ウェブ調査とは何か、従来の社会調査との違い、具体的な実装例までをわかりやすく解説。　◎2,750円

一歩ずつマスターする論理学入門

峯島宏次著　「証明」の組み立て方、日本語文の記号化の方法を、しっかり身につけられる一冊。豊富な練習問題、ていねいな解答・解説つき。　◎2,640円

〒108-8346 東京都港区三田2-19-30【価格税込】
Tel 03-3451-3584 Fax 03-3451-3122

原爆と俳句
原爆という人類の課題に対して、俳句がどのように向き合ってきたのか。俳句で原爆を記録したひとたち、今も火種を絶やさずつなぐひとたちを長年の取材を通して綴る。

【著】永田浩三
【定価】3080円（税込）

ジェンダーの視点で学ぶ憲法入門
ジェンダー法学の視点で憲法、ジェンダー法双方を平易に解説した入門書。

【著】川口かしみ
【定価】2750円（税込）

大月書店
〒113-0033 東京都文京区本郷2-27-16
TEL 03-3813-4651 HP otsukishoten.co.jp

FREE
歴史の終わりで大人になる
レア・イビ著／山田　文 訳
自由ってなに？　自由主義と社会主義、ふたつの世界を往還する20世紀の成長物語。
税込3300円

チャーチ・レディの秘密の生活
ディーシャ・フィルヨー　著／押野素子　訳
全米図書賞最終候補、ペン／フォークナー賞受賞。甘く、切ない彼女たちの〝秘密〟。
税込2640円

子どもの自殺問題の社会学
今井　聖
学校の「責任」はいかに問われてきたのか
子どもの自殺はどのように学校と関係づけられ、理解されているのか。
税込4400円

勁草書房（けいそう）　TEL 03-3814-6861　FAX 03-3814-6854
〒112-0005 東京都文京区水道2-1-1
https://www.keisoshobo.co.jp

スピリチュアリズムの時代 1847-1903
伊泉龍一　著

人々を熱狂させた社会現象に迫る
近代スピリチュアリズム研究の決定版！

19世紀半ばのアメリカに出現し、興隆を見せたスピリチュアリズムとは何だったのか。〝見えない力〟や〝霊的なるもの〟に翻弄された人々の記録を辿りながら、その背景にあった社会思想や文化的意義を踏まえて考察する。

▼定価7480円

紀伊國屋書店　出版部：東京都目黒区下目黒3-7-10
営業TEL03(6910)0519

―15分で読む―

C・G・ユングの思想を振り返る

猪股 剛（ユング派分析家・帝塚山学院大学教授）

二〇二五年は、C・G・ユング生誕一五〇年を迎える年にあたる。

彼は一八七五年にスイス・ドイツ国境にあるボーデン湖畔ケスビィルで、牧師であるパウル・ユングとエミーリエ・プライスベルグの第一子として生まれ、その後、ラインの滝近くのシャフハウゼンに、さらにバーゼル郊外のクラインヒュニゲンに転居して幼少期から青年期までをスイス南部で過ごしていく。そして、バーゼル大学で医学を学び、卒後は、精神科医としてチューリッヒ大学精神科医局で講師となり、その附属施設ブルクヘルツリ精神科病院を率いていく。そのまま大学の教授職を嘱望されていたが、三十代の終わりにみずから大学職を辞し、その後は、チューリッヒ近郊のキュスナッハトで心理療法家として活動しながら、分析心理学と呼ばれる彼独自の心理学を展開していく。

彼の心理学思想は、年を経て変化発展していくが、ここでは読書案内としてそれを著作ごとに簡潔に見ていくことにしよう。

まず二十代の最初期には、「心の解離性」に大きく注目した『いわゆるオカルト現象の心理学』と『早発性痴呆の心理』が代表作として挙げられる。前者では当時世界的に注目されていた降霊術会を研究対象として取り上げ、なぜ人の心に別の人格が現れえるのか、そして一つ以上の現実を心がリアルに体験するという現象は、どのように成り立つのかを問うていった。ユングは、いわゆるオカルト現象を信じていたわけでも、疑っていたわけでもなく、ある人々が体験する現実をその現象に即して問い直していこうとしたのである。そして同じことは、当時

早発性痴呆と呼ばれていた統合失調症を患う人々の現実性の検討にも当てはまった。そもそも二十世紀初頭の統合失調症の治療は、治療というよりも、状態像を記述して名付けていく以上のものではなかったが、ユングが大学病院で目にした現実は、レッテルを貼るだけのもので、症状を見て、その現象に寄り添い、それを理解していこうとするものでさえなかった。ユングは彼らの現実をその現象から理解していくことが治療につながると考え、一つひとつの症状をていねいに見て、その意味を理解しようとしたのである。降霊術も精神病の症状も、多くの場合、好奇の目にさらされたり、不可解なものとして放置されたりするだけで、それを意味のある現象として理解しようとする取り組みは皆無であった。おそらくその状況は、現代でもあまり変わらないだろう。ユング心理学の出発点にある現象に寄り添う姿勢は、抽象される前の現象に関わろうとする臨床的なものであり、きわめて特異なものである。ユングの心理学と哲学的な現象学に接点はないが、ユングがその著書で繰り返し、自分は現象に沿って語っているのであり、現象が自律的に語るにまかせているのだと言うのは、このためである。もちろんユングは一人の思想家でもあり、二十巻に及ぶ全集の執筆者であるのだから、彼も現象から何かを抽象して、現象を名付けて、理解していこうともする。実際、『いわゆるオカルト現象の心理学』では、現象として現れる別人格を心の「人格化」と名付け、自我とは異なるそのような人格の展開は、単なる分裂や解離ではなく、内的な可能性の発現であり、あらたな人生の展開の準備であるとユングは理解していく。また、『早発性痴呆の心理』では、患者たちの語る言葉を、文字通り、表面的な意味で理解することを中止し、まだ意味になりきらないものが、現行の文法や意味づけでは把握できないものとして噴出しているのだと捉えて、そこにはあらたな意味の創出が含まれていると考えていく。そして、意味が明確になる前の彼らの表現を、ユングは「象徴」と呼ぶようになり、意味が明確になったあとの「記号」と峻別していく。さらに、そのように言葉が複合的になって、象徴的に何かを表している状態を、コンプレックスという個人の水準で捉える視点と、コンステレーションというより広い集合的な水準で捉える視点との両方をもって、現象を理解していこうとしたのである。このような抽象化する理解

を示してはいくものの、しかし、それでも、臨床家として患者と向き合う姿勢に常に立ち戻り、いつもゼロ・ポイントから再出発して現象に関わり続けるのがユングの姿勢である。「象徴について、できるだけ多くを学びなさい。そして、夢を分析するときには、それをすべて忘れなさい」[*1]。さまざまなことを学び、しかし、いざ現象を、患者を、目の前にしたとき、それらをすべて手放し、心を開いてゼロ・ポイントから関わっていくのである。

さて、この二十代の最初期の二つの論文でユングは、それぞれで博士号と教授資格とを獲得して学術領域での土台を完成させていくのだが、この時期の重要論文としては、もう一つ『診断学的連想研究』も挙げられるだろう。それは、コンプレックスという心の複雑なあり方を言語のネットワークとして捉えようとしたユングの代表的な科学研究である。ある言葉から連想される別の言葉を分析的に見ていくのだが、そこに内在する感情の動きによって、その二つの言葉のあいだに特殊なつながりが生まれているのが見て取られ、それが、その人独自のコンプレックスを生み出していると考えていったのである。心というものは一義的なものではなく、そこにはさまざまな複合体があって、さまざまな出来事や思いが混在しながら、特殊なまとまりをいくつも生み出している。そして、そこに感情が介在すると、さらに複雑な絡み合いが成立して、決して一つの意味や考え方にはまとめることができない心の複雑な状態が生まれていく。そのことをユングは強調して、感情に彩られたコンプレックスこそが心の基本的なあり方ではないかと考えていくことになる。

この最初期のユングの思想は、心の隠れた構造を見ようとするものであり、その意味で同時期に「心の抑圧性」に注目をしたS・フロイトと意気投合することになる。日本においてユング心理学が紹介される際に、フロイトとの関係が重視されることが多いが、実際のところ、この二人の関係はユングが三十代前半であった一九〇七年から一九〇九年までの二年ほどしか継続していない。たしかにこの言語連想検査は、フロイトと近い関心を示すユングの研究ではあるが、それでさえもはじめから大きな違いを含んでいた。フロイトの自由連想とは異なり、ユングは一つの物事の周りを円を描きながら関わっていこうとするキルクムアンビュラティオ〔円環〕、あるい

は、拡充法という方法を採用している。ユングの生徒の一人であるヨランデ・ヤコービーがユング心理学の解説書を書いたときに、その違いを次のように指摘している。「あなたは、『フロイトの自由連想は個人的な文脈に使用され、元型的な素材には使用されない』と書いていますが、私は、そもそも自由連想をまったく使用しません。自由連想は当てにならない方法で、リアルな夢の素材をそこに持ち込むことはできません。（中略）私が夢の分析をする際には、いつもその周りを円を描いて巡り、タルムードの格言に従うのです。つまり、夢はそれ自身解釈なのです[*2]」。フロイトが自由連想によって心の秘密を明るみに出そうとしているのだとすれば、ユングにとっては明るみに出すことは目的ではなく、言葉にならない物事の周りを回り続け、不可解なものに対して不可解なままに関わることが重要だったのである。もし現実が二重性を持つならば、それを一つの意味に回収せず、二重のままに関わる。それが、抑圧よりも解離を重視したユングの姿勢であろう。

さて、その後、ユングは三十代半ばに差し掛かり、神話や歴史や物語の中に眠る象徴を探究して、『変容の象徴』を執筆する。これはミラーという若い女性の短い旅行記とそのファンタジーを解釈したものであるが、常識的で社会的な語りから自由になったファンタジーの中には、個人的な経験を凌駕したものが眠っており、そこには集合的な意味で、この世界の歴史そのものが埋もれていることをユングは明らかにしていく。一般的に、人は自分の個人史だけを心に携えていると思っているが、私たちがこの社会や文化や言語の中に生まれ落ちているという意味において、実は心の中には世界のさまざまな歴史や文化がおのずから存在しており、人はその影響を受けながら自分の心を成立させているとユングは考えていく。そうした集合的なものは、学んで身につけられる場合もあるが、そもそも自分が生まれている世界の風習や生活様式を通じておのずから心に作用するものであり、使用している言葉の持つ音韻や意味を通じて必然的に作用してくる。これは、ごく当たり前のことのようにも思えるが、心というものがそのはじまりから歴史性や文化性を持っていることを明示したのはユング独自の卓見であり、それを個人的な「無意識」とは峻別して、「集合的無意識」と名付けて、その心理学の特徴的な概念とし

ていく。また、その集合的無意識は、さまざまな元型を含んでいるとユングは考えていくようになる。それは歴史家が過去の文化を理解していく際に、たとえれば、戦いや暴力で世界を捉えたり、母権性で世界を捉えたり、交換や贈与で世界を捉えたり、神の姿で世界を捉えたりするのと、基本的には同じ考え方である。世界とその歴史は曖昧模糊としているのではなく、さまざまな象徴的な元型を持って生き生きと存在しているのである。そして、そうしたものが、それ独自の動きを持って、人の心を動かしているのであり、ミラーの場合には、英雄の元型が大きな役割を果たしていることがこの書物で明らかにされていく。

それに続いて、ユングはみずからの夢やイメージに対して対話的に関わり、『赤の書』を生み出していく。これは、ユングによって「無意識との対決」と名付けられる取り組みである。実際、この時期はユングの生涯の中で刊行された書物や論文が最も少ない時期であり、彼がみずからの無意識のイメージに深く関わり、それとの対決にエネルギーを割いていたことがよくわかる。『赤の書』の中でユングは自分の体験する夢やヴィジョンを書きとめ、それを理解しようとしてそれらのイメージと対話し、さらにはそれを絵に描いていく。そしてまた、そうして書かれたものを、さらにもう一度みずから解釈するという作業を根気よく続けていく。ユングは、二十代において降霊術や統合失調症と関わる中で自己展開していくファンタジーを理解していったわけだが、『赤の書』という自己を対象とした取り組みに至り、アクティヴ・イマジネーションという臨床の方法を確立していくことになる。それはつまり、①自己展開するイメージを記述し、②そのイメージを信頼して、描き、作り、この世に形あるものとして表現し、③そうして制作されたものを、提示し、陳列し、鑑賞し、④最後にみずからそれを解釈し、理解し言葉にしていく。このような方法によって、ユングは心の世界に起きている出来事を信頼し、心の展開を促し、さらにはそれをこの共同世界に届けていったのである。このような取り組みは、現実の世界を生み出し改善していく作業と対置され、心の世界を生み出し、現実世界と関わらせていく作業とされ、のちに「ソウル＝メイキング」と呼ばれていくことになる。

『赤の書』にはいくつも注目すべきイメージやヴィ

ジョンが描かれているが、その一つがフィレモンのイメージであろう。ユングは、心理学とは宗教が成り立たなくなった時代において成立した取り組みであり、信仰なきままに人が意味や存在を問うときに必要になる活動だと考えている。それがフィレモンのイメージに結実していると考えたのである。神話上のフィレモンは、神々を信仰し、他者や未知の者を歓待することのできる賢人であるが、そのフィレモンが現代に存在しないという現実にどのように関わるかがユングの心理学的実践の大きなテーマの一つなのである。ユングは、このフィレモンの姿を『赤の書』の中に記しているが、ボーリンゲンという第二の自宅の中の壁画にも描いている。自己展開するイメージをユングは建築としても表現しており、チューリッヒ湖の南東岸のボーリンゲンにみずから手作りの塔を建築し始め、一九二三年にその「塔」の門戸に「Philemonis sacrum, Fausti poenitentia」、つまり「フィレモンの聖域、ファウストの贖罪」という碑文も刻み込んでいる。ユングがおそらく最も影響を受けた書物の一つであるゲーテの『ファウスト第二部』の終盤、ファウストは豊かな街を建設し、その街が津波という自然の猛威によって壊されることのないように、海辺に防波堤を築いていく。だが、防波堤用地としてフィレモンとバウキスが暮らしていた小さな家を破壊してしまう。本来は穏便に土地を譲ってもらうつもりだったのだが、部下たちがフィレモンとバウキスの家を無理矢理奪い、しかも二人を殺してしまう。そもそもこのフィレモンとバウキスは、海からやって来たみすぼらしい放浪者を、もしくはあやしい異邦人を、素朴に受け入れて歓待した二人であり、その歓待後に、二人がゼウスとヘルメスであることがわかって、神々から讃えられる者たちである。異邦人を、未知のものを、自分が理解できない者を受け入れて歓待するというあり方を、防波堤建築のために犠牲にしたファウストの贖罪を、ユングは自分のこととして感じて、それをみずからの塔の扉に掲げたのである。「後に私は、自分の仕事をファウストが見過ごしたものに結びつけた。つまり、人間の永遠の権利への配慮、過去の人々への感謝、文化と精神史の継続といったものに結びつけたのである」[*3]とユングは記している。信仰を持った世界観がなくなっていったとき、私たちが人間の文化や歴史に対して、そして人間の心そのものに対して、どの

ように配慮や感謝を持つことができるのか、それはユングの大きな問いであり、たとえ歓待の仕方がわからなくても、それでも未知のものを迎え入れてみようとするのがユングの基本姿勢になっていったのである。

ユングはこのようにイメージに積極的にみずからを開いて作業していく『赤の書』を執筆し、それと並行して、より理論的な取り組みとして、『タイプ論』の執筆も行っていく。ユングの心理学の基本傾向に、対立物とその結合という運動があるが、イメージに深く関わる作業と並行して、『タイプ論』のような分析的な書物を執筆していくのは、まさしくこのユングの二重の取り組みという特徴をとてもよく表している事象である。そして『タイプ論』において、人間の性格を考える際にも、ユングは相反する二つのものを常に考えていく。二義的に、あいまいな形で、心の二重のあり方をあえて行き来しながら表現していく。「私の話す言葉は、二重の側面を持つ心の本質に対応しうるように、二義的で、場合によってはあいまいである必要があります。私はあいまいな表現を求めて、意図的かつ念入りに作業しています。なぜなら、その論述は一義的なものよりも優れていて、存在というものの本質に、よく対応しているからです」[*4]。つまり、ユングは決してわかりやすくタイプを整理して表現することはなく、むしろ対立するものが混じり合うかのような論述を続けて、あいまいなものをあいまいなままに表現することに力を注いでいる。たとえば、『タイプ論』の中で、カール・シュピッテラーの『プロメテウスとエピメテウス』を分析対象としながらも、自分の考え方でそれを整理して解釈していくことはせず、むしろ、ゲーテの『プロメテウス』や、バラモン教の『ウパニシャッド』、老子の『道徳経』、キリスト教の『ヘルマスの牧者』、マイスター・エックハルトの教えなど、数多くの別のアイデアや物語との比較検討によって、それを解釈するというスタイルを取っている。まさしく、「二義的」もしくは「あいまいな」表現になるようにあえて工夫が凝らされているのである。

さて、『赤の書』と『タイプ論』の執筆を終えたユングは、ちょうど五十歳になる一九二五年に、みずからの心理学を概説する『分析心理学セミナー1925』を開催している。ここには、ユング自身がそれまでに体験し論じてきたことが、整理されて提示されており、ユン

グの五十歳までの思想を理解するには最も適した入門書であろう。また、芸術と心理学の関係も繰り返して提示されており、ユングがこの二つの活動をきわめて近しいものと感じていることがわかり、表現と表現の解釈とを繰り返していくという意味で、心理学が現代アート的な取り組みを内在させていることがわかる入門書でもある。このセミナーによってユングは一度自分の心理学の全体像を提示すると共に、その三年後の一九二八年には『自我と無意識の関係』を執筆して、あえて自我の視点に立って、あいまいな二重の表現を減らして、わかりやすく心理学を提示してもいる。

さてしかし、ここまでのユングはまだ第二次世界大戦を経験する前のユングであり、アメリカ中央部やアフリカやインドを旅する前のユングであり、錬金術に出会う前のユングである。それまでのユングは、他の二十世紀の知識人同様に、近代社会や近代自我や主体性といったものの限界点を意識し、それを乗り越えていく道筋として、心の持つもう一つの現実に注目し、その集合性に注目し、そうしたものと関わる作業を通じて近代を克服していく道を歩んでいたと言っても良いだろう。しかし、一九三〇年代に入り、ナチスドイツの活動が活発になり、集合性や歴史性を政治に利用しながら、近代の行き詰まりを全体主義によって克服しようとする運動を目の当たりにすることになる。心の集合性や歴史性によって、個の暴力性や孤立性や虚無性を越えていこうとしても、それはナチスの血と土の運動とあまり変わらない個の喪失につながる可能性が見えてきたのである。また同時にユングは、アメリカのプエブロ族を訪ね、アフリカ中央部のエルゴン山への旅などを経験して、古代や原始の心のあり方は自然とあまりにも一体であることを実感し、彼らが自然に与えられた役割と一体であることに魅力を感じながらも、一方で意識性を維持することが難しい状態にあることを理解していく。

つまり、ユングは、ここに至って「心の全体」を明確に考えなくてはならなくなり、心が解離性を持ってはいるものの、その解離した片側を重視して、もう一方を補償するだけでなく、心の両面が矛盾しながらも一つの全体性を形成するにはどのようなことが必要なのかを考えていくことになる。心は個人的な部分を持ち、個人の発想や感情や思い出を携えているが、もう一方で、集合的

な部分を持ち、家族や仲間や集団の志向や考え方を持ち、歴史や民俗や信仰に根ざしている。この個人的な心と集合的な心が、共に存在しているあり方が心の全体性を形成するが、これは必ず矛盾を孕んだものとなり、その矛盾を解消せずに矛盾として抱えながら成立する心の状態とはどのようなものなのかをユングは思索していくことになる。そして、それこそが錬金術のあり方であることに気がつき、六十代以降のユングは錬金術に啓蒙された心理学を新たに展開させていくことになる。

その錬金術の一つの大きな特徴は、外側から何かを加えることはせずに、閉じられたレトルトの中で、液体が温められて気体になり、それがまた冷えて液体に戻るという循環の中で、何ものも付け加えられず、何ものも取り出されないにもかかわらず、それでいてその循環が、金を錬成していく作業となると考えられていたところにある。つまり、液体状態と気体状態が同じレトルトの中に共存し、二つの状態でありながら一つであるという運動が存在しているのである。そして、それがまさしく、矛盾を抱えた心が、両極のどちらか一方に偏って矛盾を解決してしまうことなく、矛盾を矛盾のままに作業していく運動のモデルになっていく。ユングは「私たちが心について何かを語るのではない。常に心がそれ自身について語るのである」[*5]と言い、私たちが何かを付け加えないことを明確に言葉にしており、同時に心理療法には「告白、啓蒙、教育、変容」[*6]の四つのあり方が考えられるが、この第四段階、「変容」と呼ぶ段階だけが、深層へと向かい、魂の旅が必要とされると説いている。言いにくい何かを人に告白することも、新たな考え方に照明されることも、新たなことを学んだり新たな視点を得ることも、たしかに心理療法的な効果をもたらし、それによって人の心持ちが変わっていくことはある。しかし、それはユングが考える変容ではない。なぜなら、これら三つはすべて外側からの作用や、外側との交流によって成立するものだからである。しかし、ユングが変容と考えるものは、そのような外側からの働きかけは必要なく、徹底して閉じた心そのものが心そのものとしてみずから展開させていく作業なのである。これによって全体主義を通じた個の喪失とは異なる形で、人は歴史性や集合性と通じることができることになる、とユングは考えたのである。

またユングは、「人間は、遊んでいるときにのみ、十全な人間である」と言い、「私の目的は、私の患者に、自分の性質を実験し始める心的状態――何も永遠に固定されず、絶望的に石化することもない流動性、変化、成長の状態――をもたらすことである」[*7]と言う。これがまさしく錬金術的な運動状態であり、心理学を展開させていくときのユングの姿勢である。

さて、最晩年のユングの著作の代表作と言えば、『ヨブへの答え』と『結合の神秘』と『空飛ぶ円盤』が挙げられるだろう。それぞれがユングの心理学の特徴をよく表した著作だが、まず『ヨブへの答え』は、ユングが心理学を宗教の後継であると考えていたことを表している書物であり、善と悪という問題や犠牲という問題を宗教の教義に照らし合わせて信じるのではなく、各々一人一人がみずからの心の課題としてそれに取り組みながら、一人の人の作業の末にこうした大きな課題が矛盾を抱える形にまで展開する可能性を論じていった著作である。宗教に関しては、ユングが八十三歳のときにBBCのインタビューで、「あなたは神を信じていますか」と問われて、「信じてはいません。知っているのです」と答えたエピソードが有名だが、この言葉だけに注目してしまうとユングの本質を捉え損ねてしまうとも思われる。というのも、この映像を見ればわかるのだが、ユングは、いたずらっぽくニヤリと笑いながら、「信じてはいません。知っているのです」と発言しているのであり、決してスピリチュアルなメンターのような態度で発言しているわけではないからである。神について、ユングはまさしく、信じるのではなく、みずから発見的に探究していく道を選び、それでいて、過度に真剣に神を追い求めて知ろうとしているのではなく、遊び心のようなものを持って、信仰とは何かというテーマに取り組んでいるのである。

また『結合の神秘』はユングの錬金術研究の集大成と言えるものだが、「何よりも、そこに属していないものを外部から決して侵入させてはならない。なぜなら、そのファンタジーのイメージは、必要なものをすべてその内に携えているからである」[*8]とここでも明示的にユングは発言し、錬金術の方法論を踏襲しながら、二つのものが二つのもののままで、それでいて一つのものとして結合するあり方を錬金術の解体や腐敗や昇華などの化学変化に注目しながら論じていく。

そして、最晩年の書である『空飛ぶ円盤』では、空に見られる円盤は、一つの円の象徴であり、完全性を表す形をしているという意味で、現代に見られる神の似姿であろうと論じられている。そしてそれは、困難な時代において、人間が何らかの解決を問いかけたときに、姿を見せてくれる新たなヴィジョンであるとも考えられている。しかし、UFOはその言葉通り、未確認飛行物体という未知のものであり、それが未知のものとして受け入れられ、そのうえで関わりが始まることによって、先行きが不透明な時代に新たな可能性を探究する作業になっていくのである。

ここまで簡潔にユングの思想を年代順に紹介してきたが、C・G・ユングは、個性化・集合的無意識・元型・シンクロニシティ・夢の臨床・キリスト教思想との対決・東洋思想との対話など、他の心理学とは決定的に異なるさまざまな思想や実践で、世に知られている。しかも、錬金術やUFOや易経や死者の書などが論じられ、その心との関係が語られたため、ユング心理学は、オカルト的・魔術的・非科学的というレッテルを貼られ揶揄されることもあり、また逆に、ニューエイジ運動やスピリチュアリズムに関心を持った人々から、同じタイプの思想を持つものとして、誤って歓迎されることもあった。未知のものと未知のままに関わること、矛盾を矛盾のままに運動態として関わることは、オカルトでもスピリチュアリズムでもなく、人とその心にゼロ・ポイントから取り組む方法である。それは困難を抱えた者にとってこそ必要とされる姿勢である。こうした姿勢の基盤は、もちろん、素朴に地道に学んでいくことの中にある。ユングは、心理学を学ぼうとする者に次のような要求を課している。

「まず何よりも臨床精神医学と器質的神経疾患の知識を私は求めます。第二に教育分析、第三にある程度の哲学的教養、第四に先住民の心理学の研究、第五に比較宗教学の研究、第六に神話学の研究、第七に診断的連想技術や、夢やファンタジーの解釈技術の知識から始まる分析心理学の研究、第八に自分自身の人格の訓練、すなわち、必要な教育によるその機能の発達と分化を、私は求めます。これらは、私が生徒たちに課した要求です。当然、これらの要求に応えられる人は限られていますが、私はとうの昔に工場生産をやめたのです。何よりも、私が心

理療法を子どもの知的な遊びだと考えているかのような印象を与えたくありません。そして、人間の心に関する本当の知識を得るためには、膨大な量の学習だけでなく、分化した人格が必要であることを人々に向けて明らかにすることに、私はいつも苦心しているのです。たとえ切羽詰まっていたとしても、心は一つの技法で扱うことはできません。心理療法で、私たちが扱っているのは、まさに心であって、決まった機械的な方法で扱える古い機器ではありません。そのため、心理療法が簡単な技法であるという印象を与えることは避けるべきなのです[*9]」。

世に知られているさまざまなユング思想がどんなに奇抜に見え、非科学的に見えようとも、その基盤は「患者たちが見せてくれる」ものから多くを学ぶことにあり、同時に、ここで言われているように、既存の科学の枠組みを超えて、人間とその現象に関わる誠実な努力と献身を必要とするものなのである。

注

＊1　C. G. Jung, *GW18* §483

＊2　C. G. Jung, *Briefe III*, an Jolande Jacobi am 13.III. 1956.

＊3　C. G. Jung, *Erinnerungen, Träumen, Gedanken von C.G.Jung*, Walter Verlag, 1971, S.236.

＊4　前掲書3、S.375.

＊5　C. G. Jung, *GW 9* §483.

＊6　C. G. Jung, *GW 16* §§59ff.

＊7　C. G. Jung, *GW 16* §98-99.

＊8　C. G. Jung, *GW* 14/II, §404.

＊9　C. G. Jung, *Briefel*, p.188, to Körner, 22March 1935.

猪股 剛（いのまた つよし）

1969年生まれ、ユング派分析家、臨床心理士／公認心理師。

帝塚山学院大学教授。精神科や学校臨床において実践に携わるとともに、アートやパフォーマンスの精神性や、現代の心理の深層を思索することを専門としている。二〇二五年三月に『ユング心理学の〈現在・過去・未来〉』（共著、左右社）を執筆。そのほか著書に『心理学の時間』（単著、日本評論社）、『遠野物語　遭遇と鎮魂』（共著、岩波書店）、『ホロコーストから届く声――非常事態の人のこころ』『私たちのなかの自然』『家族のおわり、心のはじまり――ユング派心理療法の現場から』『心理療法とはなにか』（編著、左右社）、訳書に『近代心理学の歴史』『意識と無意識』（いずれもC・G・ユング著、共訳、創元社）、『仏教的心理学と西洋的心理学』（W・ギーゲリッヒ著、共訳、創元社）、『夢と共に作業する』（W・ギーゲリッヒ著、共訳、日本評論社）などがある。

15分で読む　C. G. ユングの思想を振り返る　ブックガイド

ユング心理学

出版社	ISBN（978）	書名	著者名	本体価格	刊行
みすず書房	①4622023296 ②4622023302	ユング自伝――思い出・夢・思想（1・2）	C. G. ユング著、アニエラ・ヤッフェ編、河合隼雄・藤縄昭・出井淑子訳	①2800 ②品切れ	①1972 ②1973
みすず書房	4622023135	分析心理学	C. G. ユング著、小川捷之訳	2800	1976
創元社	4422117348	意識と無意識(ETHレクチャー第2巻)	C. G. ユング著、E.ファルツェーダー編、河合俊雄監修、猪股剛・宮澤淳滋・長堀加奈子訳	4000	2024
法政大学出版局	4588182136	いわゆるオカルト現象の心理学（『心霊現象の心理と病理（新装版）』所収）	C. G. ユング著、宇野昌人・岩堀武司・山本淳訳	1800	2006
青土社	4791760282	早発性痴呆の心理（『分裂病の心理（新装版）』所収）	C. G. ユング著、安田一郎訳	品切れ	2003
人文書院	4409310274	診断学的連想研究	C. G. ユング著、高尾浩幸訳	6300	1993
ちくま学芸文庫	上4480080097 下4480080103	変容の象徴――精神分裂病の前駆症状（上・下）	C. G. ユング著、野村美紀子訳	品切れ	1992
創元社	4422115771	赤の書［テキスト版］	C. G. ユング著、ソヌ・シャムダサーニ編、河合俊雄監訳、河合俊雄・田中康裕・高月玲子訳・猪股剛訳	4500	2014
みすず書房	4622021971	タイプ論	C. G. ユング著、林道義訳	品切れ	1987
創元社	4422117089	分析心理学セミナー1925――ユング心理学のはじまり	C. G. ユング著／ソヌ・シャムダサーニ、ウィリアム・マクガイア編／河合俊雄監訳、猪股剛・小木曽由佳・宮澤淳滋・鹿野友章訳	3400	2019
第三文明社レグルス文庫	4476012200	自我と無意識（原題『自我と無意識の関係』）	C. G. ユング著、松代洋一・渡辺学訳	1000	1995
みすず書房	4622012184	ヨブへの答え	C. G. ユング著、林道義訳	2200	1988

出版社	ISBN（978）	書名	著者名	本体価格	刊行
人文書院	Ⅰ 4409310250 Ⅱ 4409310267	結合の神秘――錬金術に見られる心の諸対立の分離と結合（Ⅰ・Ⅱ）	C. G. ユング著、池田紘一訳	各7000	Ⅰ 1995 Ⅱ 2000
ちくま学芸文庫	4480080578	空飛ぶ円盤	C. G. ユング著、松代洋一訳	品切れ	1993
培風館	4563055110	ユング心理学入門	河合隼雄	1500	1967
講談社学術文庫	4061588110	影の現象学	河合隼雄	1180	1987
岩波現代文庫	4006002244	ユング心理学と仏教（〈心理療法〉コレクションⅤ）	河合俊雄編、河合隼雄著	1400	2010
岩波現代文庫	4006000714	昔話と日本人の心	河合隼雄	品切れ	2002
中公新書	4121005151	少年期の心――精神療法を通してみた影	山中康裕	780	1978
創元社	4422110141	自殺と魂（ユング心理学選書4）	ジェームス・ヒルマン著、樋口和彦・武田憲道訳	品切れ	1982
青土社	4791752683	元型的心理学	ジェイムズ・ヒルマン著、河合俊雄訳	品切れ	1993
日本評論社	4535564138	夢と共に作業する――ユングの夢解釈の実際	ヴォルフガング・ギーゲリッヒ著、猪股剛監訳、宮澤淳滋・鹿野友章訳	4800	2023
創元社	4422117720	おとぎ話の心理学	M-L. フォン・フランツ著、氏原寛訳	3500	2022
創元社	4422114903	心理療法の光と影――援助専門家の《力》	A. グッゲンビュール=クレイグ著、樋口和彦訳・安溪真一訳	3000	2019
日本評論社	4535560628	概念の心理療法――物語から弁証法へ	河合俊雄	品切れ	1998

ユング心理学【ユング心理学の周辺領域（人類学・民俗学・宗教学）】

出版社	ISBN（978）	書名	著者名	本体価格	刊行
晶文社（オンデマンド選書）	4794910769	神話学入門	K. ケレーニイ、C. G. ユング著、杉浦忠雄訳	3500	2007
弘文堂	上4335650260 下4335650277	無意識の発見――力動精神医学発達史（上・下）	H. F. エレンベルガー著・木村敏・中井久夫監訳	上5600 下6600	1980

出版社	ISBN（978）	書名	著者名	本体価格	刊行
ちくま学芸文庫	4480510136	儀礼の過程	ヴィクター W. ターナー著、冨倉光雄訳	1300	2020
みすず書房	4622019725	野性の思考	クロード・レヴィ＝ストロース著、大橋保夫訳	4800	1976
せりか書房	4796702188	火の精神分析（改訳版）	ガストン・バシュラール著・前田耕作訳	品切れ	1999
岩波文庫	①4003240625 ②4003240632	ファウスト（第一部・第二部）	ゲーテ作、相良守峯訳	①1050 ②1300	1958
岩波文庫	4003313817	遠野物語（『遠野物語・山の人生』所収）	柳田国男	1050	1976
中公文庫	4122034426	山越の阿弥陀如来像の画因（『死者の書・身毒丸』の「死者の書」所収）	折口信夫	590	1999
講談社現代新書	4061155053	タテ社会の人間関係――単一社会の理論	中根千枝	840	1967
弘文堂	4335651298	「甘え」の構造	土居健郎	1300	2007
岩波同時代ライブラリー	4002601427	禅仏教――根源的人間	上田閑照	品切れ	1993
岩波文庫	4003318522	意識と本質――精神的東洋を索めて	井筒俊彦	1160	1991
岩波現代文庫	4006000707	魔女ランダ考――演劇的知とはなにか	中村雄二郎	品切れ	2001
講談社選書メチエ	4065323472	人類最古の哲学　カイエ・ソバージュ1（新装版）	中沢新一	2000	2023

知の創造的遺産
――上智大学中世思想研究所の挑戦

胡 婧（上智大学中世思想研究所 研究員）
佐藤 直子（上智大学中世思想研究所 所長）

西洋中世のキリスト教思想は、単なる歴史的遺産ではない。それは哲学・神学については言うにおよばず近代諸学の揺籃となり、さらに今日の近代批判の脈絡では直接の参照先であり続けている。西洋中世思想はいわば創造的遺産なのである。そして上智大学中世思想研究所（以下、当研究所）は、学内外の中世研究者、神学・哲学研究者の知の拠点たるべく、また当研究所自体がこの生ける知的探求の一翼を担うべく活動している。

当研究所の歩み

カトリックの高等教育機関としての上智大学において、中世神学・哲学研究は長い伝統を有する。その知的営為は戦時下も途絶えることはなく、戦後、学的状況が一定の落ち着きを見せるなか、首都圏の複数の大学――東京大学、慶應義塾大学、早稲田大学、聖心女子大学、東京都立大学、上智大学――の研究者が中世研究の研究拠点の確立に向けて合議をし、その上で、上智大学文学部哲学科教授・江藤太郎が１９５６年に文部省（当時）の

助成を受け、同学哲学科内に「中世哲学研究室」を設立する。これが現在の当研究所の前身であり、江藤は初代室長となった。

1973年、江藤の後を継ぎクラウス・リーゼンフーバーが同研究室の室長に就任する。若くしてヨーロッパでは次代の哲学・神学領域を担う人材として嘱望されていた同人のもとで、1976年に中世哲学研究室は中世思想研究所に改組され、研究領域を拡大させていく。1984年に上智大学四谷キャンパスに建設された「中央図書館」完成に伴い、8階の一室に専用書架を備えた一室を得た。リーゼンフーバーは30年余、当研究所を率いていたこととなる。次代の所長・荻野弘之は2007年に広い開架書架を備えた現在の形を整えた。

開放的な空間を備えつつ、当研究所は上智大学内外の研究者に図書の閲覧・貸出等で研究のサポートを行っている。当研究所の活動としては、リーゼンフーバー時代を受け継いだ専門図書蒐集および図書刊行の他、講演会開催が定着化し、リーゼンフーバー帰天(2022年3月31日)の後は同人の遺稿等の移管・保管にも注力している。以下、これらの活動について順に記していく。[*1]

1　図書蒐集と閲覧・貸出サービス

図書蒐集範囲は、時代からすれば2世紀から17世紀――キリスト教古代から中世を経て、ルネサンス、近世――であり、内容からすればキリスト教思想とその隣接分野――ユダヤ哲学、イスラーム哲学、西洋中世文学、中世美術・音楽、中世史(中世史一般、教会史、修道会史、聖人伝)、中世教育史・大学史、中世政治・経済思想・法思想、中世科学――である。

図書蒐集活動については、当研究所では創設当初より格段に尽力してきた。蔵書は主には洋書であるが和書を含めておよそ6万1000冊、雑誌は96誌を集め、最新の研究動向を把握できる環境を整えている。蒐集にあたっては一次文献、原典批判校訂版と原典の邦訳を含めた近代語訳に高い優先順位を付けている。特に批判校訂版はテキストが「写本」で伝えられてきた時代の研究には必要不可欠である。主要二次文献も揃えることは当然であるが、「西洋中世」が本邦では未だ馴染みが薄いことに鑑み、専門研究の入口となる一般書も蔵書に加えて

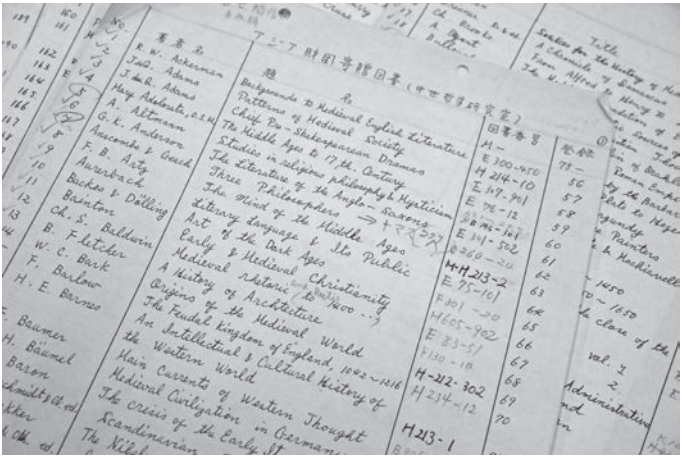


図1 「中世哲学研究室」宛の「アジア財団」からの資金で購入した図書一覧。すでに図書請求番号が付されている

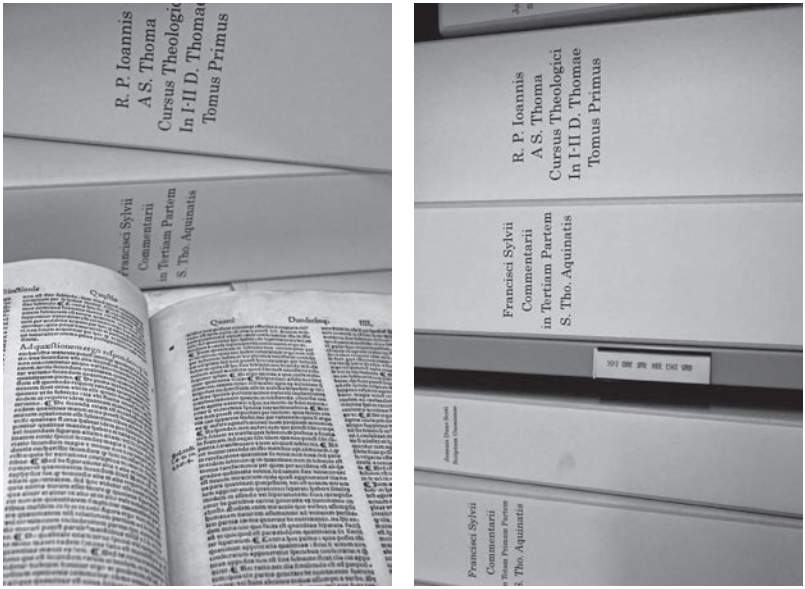


図2 貴重図書・資料については、特製の保管箱に入れて所収している

いる。当研究所のどの活動も、この図書蒐集なしには成立しない。

当研究所の蔵書が質量とも高い水準に至ったことは、歴代所長の注力の賜物である。特にリーゼンフーバーは、外部資金を得て数多の図書を購入する一方、上智大学がすでに出版活動を展開していたことから、海外出版社より「出版社割引」で購入する道筋をつけた。現在でも当研究所は直接に海外出版社から購入を行っている。この方式は財政面で図書蒐集を支えているが、それ以上に海外の学術出版動向・研究動向をいち早く把握し、研究者に供することに資している。また図書分類もリーゼンフーバーが創案した独自のものを採用している。一例を挙げれば、本邦では洋書と和書を分けることが基本であるが、当研究所ではその区切りを取り払い、ある著述家・一つのテーマについて連続した分類番号を付け、利便性の高さを担保している。

表　継続購入の洋雑誌

雑誌名	出版社	創刊
Analecta Augustiniana	Agostiniane	1905
Analecta Praemonstratensia	Praemon	1925
Archa verbi	Aschendorff	2004
Archiv für mittelrheinische Kirchengeschichte	Bistumsarchiv Trier	1949
Archives d'histoire doctrinale et littéraire du moyen âge	Vrin	1926
Archivum Fratrum praedicatorum	Viella	1931
Augustinian Studies（年2冊）	PhDC	1979
Bibliographie Annuelle du Moyen-Age Tardif	Brepols	1991
Biblioteque de l'ecole des chartes	Droz	1839
Bochumer Philosophisches Jahrbuch für Antike und Mittelalter	KNO	1997
Bulletin du Cange	Droz	1924
Byzantinische Forschungen	Hakkert	1966
Cahiers de civilisation medievale（年4冊）	Cahiers	1958
Carmina Philosophiae : Journal of The International Boethius Society	Boethius	1992
Cistercienser-Chronik.（NF）	Cistercienser	1889

雑誌名	出版社	創刊
Citeaux Commentarii Cistercienses（年4冊）	Citeaux	1960
Coincidentia	Kueser Akademie	2010
Connaissance des Peres de L'Eglise	Nouv. Cité	1981
Documenti e Studi sulla Tradizione Filosofica Medievale	Brepols（vol.14 ～ SISMEL）	1990
Filologia Mediolatina	Sismel	1994
Franciscana	Centro	1999
Hagiographica	Sismel	1994
Hortus Artium Medievalium	Brepols	1995
Journal of the Alamire Foundation	Brepols	2009
Mediaevalia : An Interdisciplinary Journal of Medieval	Global Academic Publishing	1975
Medieval People（旧 Medieval Prosopography）	MIP	1980
Medioevo e Rinascimento	Centro	1987
Medioevo Latino	Sismel	1980
Micrologus : Natura, scienze e societa	Brepols	1993
Mittellateinisches Jahrbuch	Hiersemann	1964
Nottingham Medieval Studies	Nottingham	1959
Ons Geestelijk Erf	Peeters	1943
Patristica et mediaevalia		1975
Peritia	Brepols	1982
Quellen und Forschungen aus italienischen Archiv und Bibliotheken	Urbs	1961
Reading medieval studies	Dawson	1979
Recherches Augustiniennes	Brepols	1958
Revue Mabillon: Nouv. sér.	Brepols	1990
Rinascimento, seconda serie	Olschiki	1961
Scriptorium	CEM（CENTRE D'ÉTUDES DES MANUSCRITS ASBL）	1946
Studies in Medieval and Early Modern Culture（旧タイトルStudies in medieval culture）	MIP	1964
Studi Francescani	Francesco	1914
Studi Medievali, Serie Terza	Centro	1960
Studien und Mitteilungen zur Geschichte des Benediktinerordens und seiner Zweige	KNV	1882
The Jounal of Medieval Latin	Brepols	1991
Viator, medieval and Renaissance Studies	Brepols	1972
Vivarium	Brill	2000

※2025年2月末現在

2　出版活動

中世思想研究所は、その設立当初から出版事業で学界のみならず本邦の出版界に貢献してきた。当研究所の企画・監修は、大きくは①企画論文集、②研究書・一般書の翻訳、③原典翻訳に分けられる。[*2]

①企画論文集は、数多の研究者に寄稿を募り編集した『教育思想史』（全6巻、東洋館出版社）、『中世思想研究所紀要』（1―15号、創文社／知泉書館）および当研究所所員によるモノグラフ『中世研究叢書』（創文社／知泉書館）がある。

②研究書・一般書の翻訳は、海外刊行の名著を広く本邦の読書人に供するために刊行してきた。J・ダニエルー他著『キリスト教史』（全11巻、講談社／平凡社ライブラリー）、L・ヴィエ他著『キリスト教神秘思想史』（全3巻、平凡社）、G・バラクラフ編『図説キリスト教文化史』（全3巻、原書房）、W・バンガート著『イエズス会の歴史』（原書房／中公文庫）等がある。

③原典翻訳シリーズは、リーゼンフーバーの博覧強記ぶりを遺憾なく示す当研究所企画監修原典翻訳シリーズ『中世思想原典集成』（全20巻＋別巻、平凡社）の名前を挙げなければならない。使徒教父から近世スコラ学まで、時代別に一巻とし主要著述家のテキストを邦訳した。本シリーズのなかには、近代語訳初のテキストも含まれる。本シリーズからさらに厳選されたテキストを文庫化・電子書籍化し、『中世思想原典集成・精選』（全7巻、平凡社ライブラリー）が刊行された。また『中世思想原典集成・第Ⅱ期』が企画され、現在第3巻まで刊行されている（平凡社）。原典翻訳が世に示すものは、中世という時代の豊かさはもちろんのことであるが、「人格」「個」等の哲学の基礎概念のみならず現代社会で人口に膾炙する用語が、長きにわたるキリスト教の教義形成や霊性運動のなかで彫琢されてきた概念であった、という事実である。

当研究所の図書刊行事業に際しては、本学・他大学の研究者、出版関係者、当研究所職員の多大な協力があった。当研究所事務室のキャビネットには、シリーズの企画構想資料や生原稿、関係者との書簡等が保管されている。

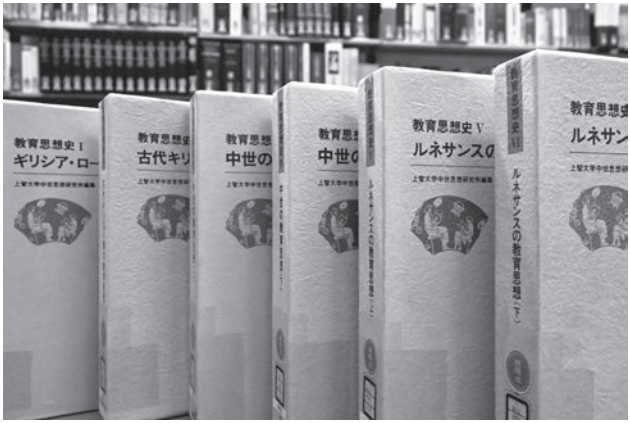


図3
『教育思想史』
東洋館出版社

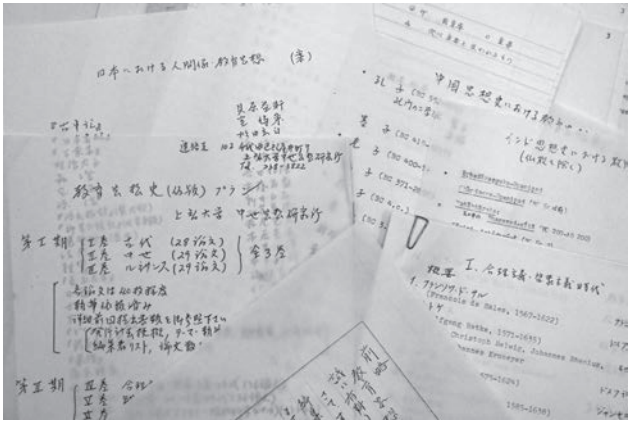


図4
『教育思想史』に関わる
手書き資料（一部）

図5
『中世思想原典集成』
平凡社

3　講演会・研究会

リーゼンフーバー所長引退後、当研究所に加わった活動としては、講演会・シンポジウム開催が挙げられる。当研究所の講演会・シンポジウムは、ある時には協力関係にある学会の活動と連携しながら、年2回開催している。また講演会の参加者には研究者や大学生のみならず、一般社会人や高校生も念頭におき、学際性や研究者間の世代間交流をも鑑みながら、講演会を企画してきた。研究動向をより迅速に直接に社会に還元するためには、登壇者と参加者が時間空間を共にする講演会はたいへんに有効な方途である。登壇者同士での、さらにはフロアーとの質疑応答は、登壇者の専門研究に新たな視点を開く機会ともなる。

きわめて地道な活動であるが研究会の開催も紹介すべきであろう。そもそも他大学研究者との合議により「中世哲学研究室」が発足したことには、戦前戦後を通して上智大学で開催されていた研究会「トマス会」が海外の学術誌に紹介されたことを一つの契機としている。[*3] コロ

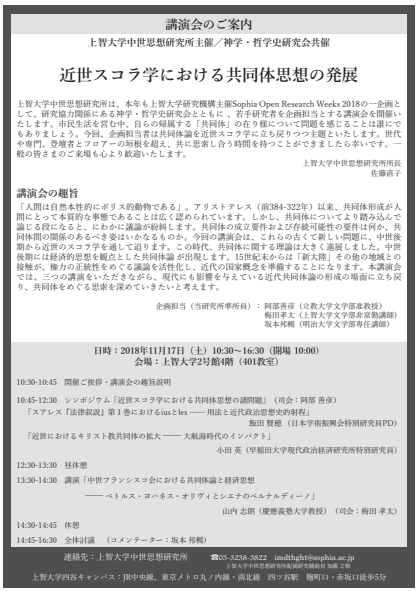


図6　研究所主催の講演会「近世スコラ学における共同体思想の発展」2018年

ナ禍により休止している研究会もあるが、「ドゥンス・スコトゥス研究会」（代表者：小川量子）はいち早く活動を再開した。こうした研究会で当研究所所蔵図書が活用されていることは言うまでもない。

4　元所長リーゼンフーバー遺品の移管・保管

本業務は、元所長リーゼンフーバーの遺志に基づき、所定の手続きを踏み、当研究所の活動としたものである。イエズス会士であるリーゼンフーバーは、昼は教育・研究に勤しみ、夜は宣教活動に従事し、一日として休むことはなかった。同人の業績は、本邦では前記の翻訳シリーズ、モノグラフで知られているが、その原文（ドイツ語）は知られてはいない。また宣教活動で同人は、その学識と深い霊性を基盤に、「キリスト教入門講座」など、体系的な司牧活動を展開していた。当研究所ではリーゼンフーバーの自室に残された資料（原稿、メモ、書簡、磁気テープ、写真等）について順次、イエズス会日本管区からの移管を進め、保管している。また音源や原稿から権利関係やプライバシー上の問題がないものを選び、２０２４年度より、僅かずつではあるが、当研究所のホームページ内の「元所長クラウス・リーゼンフーバー先生記念ページ」に公開している。

図7　講演会の様子　※「グレゴリオ聖歌――本質と霊性」
（講演者・杉本ゆり、司会者・荻野弘之、2025年3月1日撮影）

緒に就いたばかりではあるが、この活動は同人への感謝の念を示すのみならず、今後の「リーゼンフーバー研究」さらには同人が生きた時代の思想史的状況の研究に資するものとなる。同人の活動全体が客観化することを通じて、啓蒙主義的人間観に還元されえないキリスト教的な深い人間理解と広やかな世界観、「信仰と知」という思想史を貫流する問題が同人においていかなる仕方で顕在化したかが明らかになるであろう。

終わりに

現在、研究者には学術発信が求められ、それは最終的には個々の研究者の業績となる。しかし中世思想全体の研究には十分な一次文献・二次文献のストックは不可欠であり、それは研究者個人の図書蒐集能力の範囲を超える。また学術発信の場は、社会還元を考えれば多様であるべきだが、個々人による情報発信が容易となるなかで、質の一定の担保は欠かせない。知は孤立して成立するものではない。また一部の専門家間でのみ循環するものでもない。学術・文化の発展には、発信以前に集積が必要であり、当研究所の図書蒐集活動はそのためのものである。また母国語による基本文献へのアクセスは、発信者である研究者に資するのみならず、学術発信の受容者である一般の社会人の関心を喚起し、学術の社会還元が成立する状況そのものを醸成する。この点、現代的な知の在り方の欠落を補うものとして当研究所は機能しており、その活動は「研究以前の研究活動」であり、それ自体きわめて挑戦的であると言えよう。歴代所長と所員によって紡がれた過去の当研究所の学的営為は、中堅・若手研究者による継承を着実に行ない、未来に向けてその可能性を広げようとしている。

注

＊1　リーゼンフーバーの功績については、当研究所ホームページ「元所長クラウス・リーゼンフーバー先生記念ページ」https://dept.sophia.ac.jp/is/imdthght/memorial/を参照。

＊2　詳細については、当研究所ホームページ「刊行物」https://dept.sophia.ac.jp/is/imdthght/publications/を参照。

＊3　佐藤直子「「上智大学中世思想研究所」の歩みと使命」、『西洋中世研究』第5号、知泉書館、2013年。

ロシア語文学のミノタウロスたち

栗本 麻央（白水社 編集部）

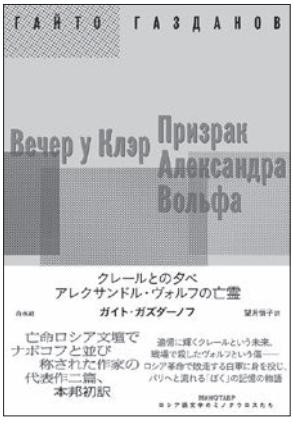
「ロシア文学」の観念を攪乱するような、異形の文学作品を紹介すると謳った《ロシア語文学のミノタウロスたち》のシリーズは、二〇二二年の七月に刊行を開始した。同年二月二十四日にはじまるロシアによるウクライナ侵攻から半年も経ってないタイミングであったために、当時、「なぜいま?」と尋ねられることもあった。そこには同情と、あからさまではないとはいえ微かな軽蔑の響きも、もしかしたらあったのかもしれない。

第一巻はガイト・ガズダーノフ（望月恒子訳）『クレールとの夕べ／アレクサンドル・ヴォルフの亡霊』であった。作者のガズダーノフ（一九〇三―七一）は、オセット人の両親のもとペテルブルクに生まれるが、父や妹を亡くし、少年期にウクライナへ移り住むことになる。ハルキウの中学在学中にロシア革命が勃発し、十六歳で白軍に身を投じたガズダーノフは、戦禍のなか、一九二〇年十一月に彼の地を離れ、最終的に二三年の暮れに亡命ロシア人たちの集まるパリに到着し、肉体労働や夜間のタクシー運転手をしながら執筆活動を行なっていた。

「訳者あとがき」への「追記」のなかで望月哲男先生は、訳者の恒子先生がかねてからガズダーノフのことを「難民作家」と評していたと伝えてくださっている。刊行を間に合わせることができず、その四月に逝去された恒子先生は、本シリーズが「非ロシア人によってロシア国外で書かれた作品で幕を開けることは、私にとって望外の喜びである」と書き残してくださった。だから、「なぜいま?」と問われるたびに、「まさにいまがそうだから」という答えはつねに胸にあった。もちろん、シリーズを構想する段階でそうした状況になってしまうと

は考えてもいなかったのだけれども。

個人的なことを書くことをお許しいただきたいのだが、わたし自身は多少なりともロシア文化に親しみ、モスクワに長期滞在したこともあるものの、とりたててロシアが好きというわけではない。それは、戦争とは関係なく、もともと、小説でも美術でも映画でも音楽でも、個々の作品をことさらナショナリティに結びつけて考える感覚がぴんとこないからにすぎない。ロシア文化に馴染みのある人たちの間ではしばしば、「ロシア」のあらゆるものやことに関わろうとする傾向が見られるように思う。そのロシアへの愛は、ロシアをもっと知るために、ロシアの小説を、ロシアの美術を、ロシアの映画を、ロシアの音楽を求めるだろう。だから、そうした人たちが、「特別軍事作戦」に接して、自らの嗜好を顧みて過度に恥じたり、意図するにせよしないにせよロシアを擁護したりするのを目の当たりにすると、それに比べて自分はきわめて酷薄だと感じるのだが、一方で、きっと自分がこの界限ではしょせん偽物だからだという意識もある。



『クレールとの夕べ／アレクサンドル・ヴォルフの亡霊』

もっとも、二〇二二年二月二十四日以後に世界的に起こった粗っぽいロシア文化叩き、俗にいうキャンセル・カルチャーには辟易した。ただ、この出来事は、なにか作品を受容するときに、それほどナショナリティが意識されることがあるのだという現実を実感させられる機会でもあった。

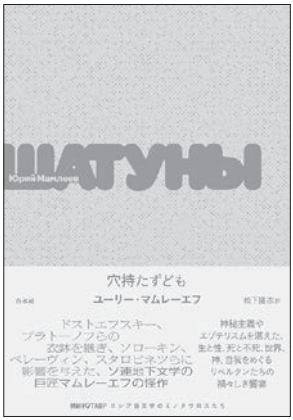
話を小説や文学に限定するが、基本的に読書とは、「わたし」と作品とが一対一で対峙することだと思っている。もちろん、その作品を正しく理解するためには、ナショナルなものを含め、その作品が成立した時代背景や作家の生涯、文化的文脈などを知る必要はあるだろうし、それは一般的に「深い読み」を導くことになるはずだ。けれども、いうまでもなく、その正しさにこだわりすぎると読書は窮屈になってしまうし、さらには「わた

しが読む」ことの意味や責任を放棄することになりかねないのもまた確かであるように思う。

それにともなって、作品がつくりだす現代の読者の共同体のありかたにも、自分はあまり乗れないなと思うことがしばしばある。もちろん、それを否定するつもりは毛頭ないのだが、その作品を読んでいる最中や読み終わった後に、作品によって生じた違和を自らの内に棲まわせ、時間をかけて心身深くになじませていく過程こそが、少なくともわたしにとっての「読書」だと感じる。それが拙い読書体験になったとしても決して貧しくはないだろうし、仮に、ネットやSNSを徘徊して誰かの言葉、というよりは何か「答え」のようなものを求めるにしても、それを急ぐ必要はないのではないか。孤独な作業である「わたしの」読書をすぐさま他者に明け渡さないこと、安易に違和を解消せず、自らの内に抱え込むこと——そのことが、他者との対話の条件になるのだとわたし自身は考える。

このシリーズ《ロシア語文学のミノタウロスたち》でとりあげたいのは、ロシア語文学という、われわれにとって遠さと近さとを併せもち、そこにある他者性を安易に消去したり、我有化したりしがたい作品群だ。二十世紀を中心にロシア語で書かれた文学作品のうち、その異貌の佇まいにもかかわらず、「古典」といわれるにふさわしい強度をもった作品をラインナップしようと考

『幸福なモスクワ』



『穴持たずども』

えた。それは作家の力量に依るところが大きいとはいえ、わたしが惹かれるのは、ある場所で、ある時に、ある言語でしか書き得なかった、生まれ得なかっただろうその作品の独異性である。そのとき問題となるのはロシアという国家ではなく、あくまでテクストによって構築され、立ちあらわれる世界だ。

第二巻のアンドレイ・プラトーノフ（池田嘉郎訳）『幸福なモスクワ』は、スターリン体制下で変貌を遂げつつある都市モスクワで、その名を与えられた孤児モスクワ・チェスノワの活躍と、来たるべき共産主義社会を胚胎するような彼女の言動に触発されながら、思索し、対話し、みずからの進むべき道を模索する彼女を取り巻く男たち――死の瞬間を解明し生命の内奥を探りあてようとする医師、より精度の高い秤の発明に勤しみながらも自らを捨て別人に生まれ変わろうとする機械技師ら――とが織りなす特異な世界観が、独特な言語で描かれている作品である。また、第三巻のユーリー・マムレーエフ（松下隆志訳）『穴持たずども』は、一九六〇年代のモスクワ郊外を舞台に、殺人を重ねながら魂や死、彼岸の世界を追求する主人公ソンノフと、彼と共同生活を営む奇妙な人々――世界を不条理で満たさなければ気がすまない異常性癖をもつ妹や、快楽の産物として子どもが生じることが許せない男、日がなごみ溜めを漁る少女、自らの疥癬を食す少年ら――に、「形而上的娼婦」アンナを中心としたグノーシス的神秘思想をもつ「形而上派」の面々が合流し、奇怪な出来事を巡りながら、それぞれ

МИНОТАВР

［シリーズ］
ロシア語文学の
ミノタウロスたち

穴持たずども
ユーリー・マムレーエフ 著
松下隆志 訳
生と性、死と不死、世界、神、自我をめぐる「異常者」たちの物語。神秘主義やエゾテリスムを湛えるソ連地下文学の巨匠の怪作。
◎4,180円

幸福なモスクワ
アンドレイ・プラトーノフ 著
池田嘉郎 訳
特異な世界観と言語観で生成するソ連社会を描いたプラトーノフ――共産主義を象るモスクワ・チェスノワと彼女をめぐる「幸福」の物語。
◎3,300円

クレールとの夕べ／アレクサンドル・ヴォルフの亡霊
ガイト・ガズダーノフ 著
望月恒子 訳
ロシア革命で敗走する白軍に身を投じ、パリへと流れる「ぼく」の記憶の物語。
◎3,520円

白水社
東京都千代田区神田小川町3-24
TEL 03-3291-7811 ◎価格税込
www.hakusuisha.co.jp

が独自の(超)独我論を展開していく思想劇的スラップスティックだ。

もちろん、両者は物語としてはまったく趣向の異なる作品であり、描かれる思想や世界観にも共通性はなく(とも言い切れない部分もありそうだが)、両者を並べて何かを記すこと自体、意に染まないところがあるものの、しかし、生じる読後の感覚で共通するものを挙げるとすれば、「よくわからない」という感覚になるだろうか。当然ながら、そのわからなさはそれぞれまったく異なるし、より精確には「わかることに対するためらい」というべきなのかもしれない。

目下、さまざまな国や民族、言語の文学作品が翻訳されていて、それらに比して、「ロシア語文学」はすでに、もの珍しさやマイナーさがもつ希少価値という魅力はなく、いまさらな感じもあるだろう。けれども、そうしたさまざまな国や言語の文学作品の多くが、もっぱら共感や「〜はわたしだ」という感覚を媒介に消費されている(ように思われる)現状は、本来、そこにあるはずの「他者性」への度し難い鈍感さを示しているか、あるいは、グローバリズムがもたらす均質で平板な世界や粗暴な感情を黙過し、もしかしたら結果的に言祝ぐことになっているのではないだろうか。ここでいう「他者性」とは、むろん、一方では異文化性ということであるものの、他方でそれは、文学そのものの謂れであり、文学性ということでもある。わたしはあなたではないし、あなたはわたしではない——そうした違和感やわからなさをけっして手放すことなく他者にじっくりと対峙すること、それもまた文学の経験が与え、文学によって培われる力だと信じる。哲男先生が刊行の辞に書いてくださったように、「人はいつか静かに老いるだろうが、物語は常に若く、答えのない問いを発し続ける」のだから。

❖

ミノタウロスは、ダイダロスによって作られた脱出不可能な迷宮に棲まわされた独異なるもの(モンスター)であった。われわれは、異形のミノタウロスを打ち斃し、アリアドネの糸で迷宮から生還する英雄テセウスになる必要はない。むしろ一個のミノタウロスとして、迷宮をさまようべきなのだ。ロシア語文学のミノタウロスたちとともに。

人文会会員名簿

〒113-0033　文京区本郷2-20-7　みすず書房内

2025年4月現在

社　名	担当者	〒	住　所	電　話	FAX
大月書店	佐藤　信治	113-0033	文京区本郷2-27-16 2F	3813-4651	3813-4656
紀伊國屋書店	段塚　省吾	153-8504	目黒区下目黒3-7-10	6910-0519	6420-1354
慶應義塾大学出版会	乙子　智	108-0073	港区三田2-17-31	3451-6926	3451-3124
勁草書房	東原　亮佑	112-0005	文京区水道2-1-1	3814-6861	3814-6854
春秋社	吉岡　聡	101-0021	千代田区外神田2-18-6	3255-9611	3253-1384
晶文社	福士篤太郎	101-0051	千代田区神田神保町1-11	3518-4940	3518-4944
誠信書房	郡司　恵太	112-0012	文京区大塚3-20-6	3946-5666	3945-8880
青土社	森　卓巳	101-0064	千代田区神田猿楽町2-1-1 浅田ビル1F	3294-7829	3294-8035
創元社	水口　大介	101-0051	千代田区神田神保町1-2 田辺ビル	6811-0662	3219-7800
筑摩書房	河内　秀憲	111-8755	台東区蔵前2-5-3	5687-2680	5687-2685
東京大学出版会	足立　佑	153-0041	目黒区駒場4-5-29	6407-1069	6407-1991
日本評論社（休会中）		170-8474	豊島区南大塚3-12-4	3987-8621	3987-8590
白水社	岩野　忠昭	101-0052	千代田区神田小川町3-24	3291-7811	3291-8448
平凡社	栗生　圭子	101-0051	千代田区神田神保町3-29	3230-6572	3230-6587
法政大学出版局	三木　拓	102-0073	千代田区九段北3-2-3 法政大学九段校舎1F	5214-5540	5214-5542
みすず書房	片桐　幹夫	113-0033	文京区本郷2-20-7	3814-0131	3818-6435
ミネルヴァ書房	本橋　弘行	101-0062	千代田区神田駿河台3-6-1 菱和ビルディング2F	3525-8460	3525-8461
吉川弘文館	片山　伸治	113-0033	文京区本郷7-2-8	3813-9151	3812-3544

代表幹事　片桐幹夫
会計幹事　片山伸治
書記幹事　水口大介

《◎委員長（幹事）　○副委員長》

販売・企画委員会　◎吉岡　聡　○段塚省吾　佐藤信治・福士篤太郎・郡司恵太・栗生圭子
調査・研修委員会　◎森　卓巳　○東原亮佑　足立　佑・河内秀憲
広報委員会　◎岩野忠昭　○乙子　智　三木　拓・本橋弘行

人文会ホームページ　https://www.jinbunkai.com/

（各種情報／各社へのリンクはこちらからどうぞ）

『純粋理性批判』を立て直す カントの誤診1

永井均

カントの『純粋理性批判』を引用し、それにコメントしていく形でカントの画期的な素晴らしさを示しつつも、永井哲学の独在論からその議論の不適切さや難点を指摘する。 3520円

責任と物語

戸谷洋志

私たちは、人生という物語を生きている。人格を通じて省察することが責任を引き受けることであり、物語的責任は他者との許しと約束によって、支え合う関係へと深められていく。2200円

春秋社 東京都千代田区外神田2-18-6（税込）
☎03-3255-9611 FAX 03-3253-1384

感覚・知覚心理学ハンドブック 第三版

和氣典二・重野 純・村上郁也 編

『感覚・知覚心理学ハンドブック』の第三版が登場！これまでの研究から最新の知見まで、国内外の感覚・知覚研究を一冊に網羅。 57200円

心理支援における社会正義アプローチ

不公正の維持装置とならないために

和田香織・杉原保史・井出智博・蔵岡智子 編

個人の問題を文化・社会・経済面から捉える社会正義（ソーシャル・ジャスティス）。この考え方を心理臨床にどう活かすのかを問う。3300円

文化心理学への招待

記号論的アプローチ

ヤーン・ヴァルシナー 著 サトウ タツヤ 監訳

「記号」を媒介とした、人間の未来志向的かつ動態的な発達を描くことを目指す「記号論的動態性の文化心理学」について解説。4290円

誠信書房 SEISHIN SHOBO Tel 03-3946-5666
東京都文京区大塚 3-20-6

友達の数は何人？

ダンバー数とつながりの進化心理学

ロビン・ダンバー

私たちは人とのつながりがなければ生きていけない。進化心理学の視点から縦横無尽に展開される、私たちのつながりの起源。 2860円

立岩真也を読む

稲葉振一郎＋小泉義之＋岸政彦

三人の思想家が不世出の社会学者の核心に迫る。「立岩真也」と出会う／出会いなおすための最良の書。 2420円

映画の隔たり

ジャック・ランシエール

映画とはひとつの理論に収斂されない、「隔たりの体系」である。哲学者はいかに映画と交わるのか、その論理をみよ。 3740円

青土社 東京神田神保町 ☎03-3294-7829
http://www.seidosha.co.jp/（価格税込）

新・動物の解放

ピーター・シンガー 著
井上太一 訳

動物の権利運動における不滅の名著、30余年ぶりの全面改訂版を完全新訳！！

最新のデータと議論にもとづき、本文の3分の2を改稿。さらに気候変動や新型ウイルスなど新たなトピックを盛り込み、21世紀の緊急課題に応える。 4400円

序論 ユヴァル・ノア・ハラリ

晶文社 〒101-0051 千代田区神田神保町1-11
Tel.03-3518-4940 Fax.03-3518-4944

傳田光洋

境界で踊る生命の哲学

皮膚感覚から意識, 言語, 創造まで

阿部公彦氏推薦！
——〈文系自認〉の人にも入りやすい理想の「知の教室」。知はおもしろく、美しい。

3,520円（税込）

東京大学出版会
〒153-0041 東京都目黒区駒場 4-5-29
TEL 03-6407-1069 FAX 03-6407-1991
https://www.utp.or.jp/

創元社

「数字」から世界を眺めるビジュアル図鑑

数字でみる世界図鑑

C・ギフォード［著］／千葉喜久枝［訳］
A4判変型・上製・192頁・定価3,850円

数字でみる動物図鑑

R・ミードほか［著］／千葉喜久枝［訳］
A4判変型・上製・192頁・定価3,850円

大阪市中央区淡路町4-3-6〈税込〉
TEL06-6231-9010 Fax06-6233-3111
千代田区神田神保町1-2 TEL03-6811-0662

平凡社ライブラリー

新版 昭和史 戦前篇 1926-1945
新版 昭和史 戦後篇 1945-1989

半藤一利＝著

累計100万部のベストセラー「昭和史」シリーズの戦前・戦後篇が新版に！ 各章のポイントや索引、解説を新たに追加。戦後80年の今こそ読み継ぐべき本。

●B6変型判／各定価1320円（10%税込）

平凡社 〒101-0051
東京都千代田区神田神保町3-29
tel 03-3230-6573 fax 03-3230-6587
https://www.heibonsha.co.jp/

2024年
ピューリッツァー賞受賞作

アーベド・サラーマの人生のある一日
——パレスチナの物語

ネイサン・スロール 宇丹貴代実＝訳

ヨルダン川西岸地区で園児たちの乗ったバスが燃えた。アーベドは息子を探して奔走する。占領とは何かを問う悲劇のノンフィクション。

『ニューヨーカー』『タイム』『エコノミスト』他15誌の年間ベストブック

●定価2640円

筑摩書房 営業部 03-5687-2680
＊定価は10%税込です。
https://www.chikumashobo.co.jp/

「帝国」の実像に巨視的な視点から迫る

アメリカ帝国【上・下】
——グローバル・ヒストリー

A・G・ホプキンズ著
菅 英輝／森 丈夫／中嶋啓雄／上 英明 訳
【上巻】税込6600円／【下巻】税込6050円

史料と旅する中世ヨーロッパ
図師宣忠／中村敦子／西岡健司編著
歴史像の背景にある史料の読み解き方を学ぶ。
税込3080円

ミネルヴァ書房
〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1
TEL075-581-0296 価格税込／宅配可

法政大学出版局
https://www.h-up.com/

ベン・ブラッドリー自伝
『ワシントン・ポスト』を率いた編集主幹
ベン・ブラッドリー 著／根津朝彦，阿部康人，石田さやか，繁沢敦子，水野剛也 訳
ペンタゴン文書報道やウォーターゲート事件で知られる『ワシントン・ポスト』紙の名編集主幹ブラッドリーの自伝。米国民主主義の真実。 4950円

アーレントとテクノロジーの問い
技術は私たちを幸福にするのか？
木村史人，渡名喜庸哲，戸谷洋志，橋爪大輝 編
テクノロジーが生活環境を全面的に管理する現代。アーレントの科学技術論を軸に，技術がもたらす抑圧や悪，または幸福を批判的に問う。 2970円

〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-3
☎ 03（5214）5540 ／表示価格は税込です

日本史教科書検定三十五年
照沼康孝著
教科書調査官が回顧する
家永第三次訴訟、新しい歴史教科書、沖縄戦集団自決の検定問題。「平成のミスター検定」が語る調査官のしごとと検定の歴史。
2420円

20のテーマでよみとく日本建築史
海野 聡編
古代寺院から現代のトイレまで
東京大学建築学専攻海野研究室が伝える建物と空間の魅力！
2420円

渋沢栄一と鉄道の近代
恩田 睦著
鉄道事業は民営か、国営か？ 渋沢の鉄道構想を解き明かす。
2750円

吉川弘文館 東京都文京区本郷7-2-8
☎03-3813-9151 税込

存在の四次元 意識の生物学理論
ルドウー 練達の脳神経科学者による新理論。生命を四つの次元でとらえ、意識をめぐる難題に挑む。高橋 洋訳 三九〇〇円

競争なきアメリカ 自由市場を再起動する経済学
フィリポン アメリカは自由市場を諦めたか？ 現代経済最大の難題「競争」に、ファクトで挑む。川添節子訳 四五〇〇円

グローバル社会の哲学 現状維持を越える論理
押村 高 グローバル空間を社会と捉えるとき、我々は何を求められるのか。国際正義論のパイオニアの最新論集。四五〇〇円

大気を変える錬金術 ハーバー、ボッシュと化学の世紀
ヘイガー 窒素資源を生む化学史上最大の発明がもたらした戦慄の歴史。【新装版】渡会圭子訳 白川英樹解説 四五〇〇円

みすず書房（税込）
東京文京本郷2-20-7 www.msz.co.jp

2025年4月25日発行 年3回発行 第149号
発行所 人文会
〒113-0033 東京都文京区本郷2-20-7 みすず書房内
編集協力 アジール・プロダクション
印刷 中央精版印刷株式会社
〈非売品〉